

## 鵜はどこへ飛んで行く

— 鵜祭と変わりゆく伝統 —

市田雅崇

一二月一六日早朝四時前、冬の日本海の波が静かに押し寄せる羽咋市一ノ宮の海岸の空に、三年ぶりに鵜が舞った。能登一宮気多大社の神事鵜祭、最後の一幕である。二年間、主役となる鵜を捕まえることができなかったため、鵜不在で神前での祝詞奏上のみ執り行われていた。

鵜祭を初めて見たのは一九九七年一二月、学生だった私は午前三時からはじめまる神事を見ようと、深夜に宿泊先を抜け出し、静寂した深夜の県道を一人で一時間あまりかけて気多大社に赴いた。拝殿で鵜祭を見た後、放たれる鵜を見るために関係者一行とともに海岸へ。なにしろ初めてのこと、鵜が放たれる動向に気をとられている間に、砂浜に押し寄せた波で足元がびっしりと濡れた。一連の儀礼が終わると、夜明け前の同じ道を濡れた足のまま一人帰路についた。思えばこれが研究として祭りを見る初めての経験だった。それから二〇数年、何度も通うたびに知り合いも増え、直会の席にも顔を出させて

鶇はどこへ飛んで行く（市田）

もらうようになった。こうして鶇祭を現地で見たり聞いたりしていると、変わったことと変わらないところが見えてくる。大きな変化としては「気多の鶇祭の習俗」として国指定重要無形民俗文化財に登録されたことがあげられる（二〇〇〇年）。羽咋市と七尾市ではそれ以前に市の民俗文化財となっていたが、県の指定を飛び越えて国指定となるのは異例のことであり、国指定となったことにかかわるいろいろな地元の声も耳にした。文化財になったことや、社会の変化によって鶇祭を取りまく環境も変わりつつある。この年（二〇二一年）の鶇祭を見て考えたことを少し書きとめてみたい。

鶇祭は生きたままの鳥を神前に供するめずらしい祭りとしても知られる。この鶇は気多大社（石川県羽咋市）の北東三〇kmほど離れた七尾市鶇浦の鹿渡島の断崖に飛来してきた海鶇から捕獲される。捕らえられた鶇は神格化され、祭りの間、丁重にあつかわれる。鶇の形や毛色、動きは来年を占うものとされ、羽をはばたかせたり、食事（寒鮎）といった一挙手一投足まで敬語であらわされる。一羽の鶇は神意によって「鶇様」として鹿渡島の断崖から「あがられる」のだ。伝説では、鶇は気多神の化身であるとか、鶇浦の神である御門主比古神が鶇の姿になって気多神に奉じたものであるとか諸説あるが、いずれにしてもこの地で鶇は神の化身として語られ信仰の対象となってきた。

鶇様は鶇捕部とよばれる古くから鶇を参籠してきた人たちによって気多大社まで運ばれる。移動距離は道のりにして四〇km以上、二泊三日かけて七尾市、中能登町、羽咋市を徒歩で参向するのである。そして二月一六日早朝気多大社で神事が執り行われる。神前にて神職と鶇捕部の問答の後、鶇様は神前に放たれる。このとき鶇様は神前の案の上におかれたろうそくにむかって進むのだが、この鶇様の動

きて来年の状勢があらわされるといふ。太平洋戦争の前年には、鶺鴒様が案上のろうそくをくわえて放り投げたと伝えられている。こうしたこともあって、地元の人たちにとっては大きな関心ごとであり、ろうそくの灯のみの真つ暗な静寂のなか、神職、鶺鴒捕部、参拝者、地元メディアがかたがたをのんで鶺鴒様の動きを見守る。そして鶺鴒様が案上に飛び乗るやいなや、神職が鶺鴒様をとりおさえ、冒頭に書いたように一ノ宮の海岸に放たれるのである。放たれた鶺鴒様は、能生（新潟県）に飛んでいくとも、諏訪に飛んでいくとも言われている。

民俗学において、柳田国男以来、祭りは主たる研究対象のひとつである。祭りの変遷を追い求めたり、構造機能主義的分析から地域社会を見たり、あるいは祭祀研究として多くの研究が積み重ねられてきた。近年では文化財化にまつわる問題や、過疎化や少子高齢化に直面した地域社会といった視点からの研究が多い。そこでは何が正統な（あるいは正当な）文化であるのかという問題も避けては通れない。文化の正統性とはなにか、ということ論じる前に正統な文化を追い求めるのは本末転倒だ。あたりまえのことだが、こうした問題は祭りを支える人びとのあり方を追って行って見えてくるものであり、研究者の頭にはがかれたものが正統的な文化ではない。

地域社会においてこうした正統性はしばしば「伝統」という言葉で包まれ、判断不能にさせている。「この祭りは伝統あるものだからきちんとしたかたちで後世に継承しなければならぬ」というように。この「伝統」が祭りの変化を拒み、社会に対応したかたちでの維持・継続の足かせになっていることも否めない。たとえば、祭りにおける舞役は決められた家の長男でなければならない、祭りで用いる道具は

鶉はどこへ飛んで行く（市田）

従来の素材と作り方で作成しなくてはいけない、といったように枚挙にいとまがない。とくに文化財などに登録され、権威化された文化になると、慣習が明文化され、その枠からはみ出して祭りを行うことが困難になってくる。

とはいえ、担い手となる後継者が不足している祭りでは「伝統」を緩和しつつ、現状に対応して、担い手の門戸を開放して維持・継続している祭りも多々見られる。二〇一八年ユネスコ無形文化遺産として「来訪神 仮面・仮装の神々」が登録された。これは国内の一〇の来訪神行事を構成資産としているが、そのうちの一つが秋田県男鹿半島のナマハゲである。大晦日、蓑笠など藁に身を包み、異形の面をかぶったナマハゲが各戸を廻るというあの有名な行事だ。若者の男性がとめてきたナマハゲも少子高齢化で後継者が不足し、継続が不可能になった地区もあれば、継続のため門戸を外部者にも開放しつつある地区も出てきた。奥能登の収穫を神に感謝する行事であるアエノコト、こちらは一九七七年に重要無形民俗文化財に指定、二〇〇九年にユネスコの世界無形遺産に登録された。かつては家の行事として田の神を饗応してきたが、今では報道陣や観光客といった外部のまなざしのもと、家の伝統ではなく周囲が求める「伝統」に対応する方向でかたちを変えて継続されている。

こうした文化遺産・文化財として有名なもののみならず、全国の祭り・行事が継続のためにその慣習を変えつつある。それまで特定の家の長男といった限定された人しか参加を認めていなかった慣習を緩和し、祭りに携わることができるようになる人の条件を広げたり、従来の組織を保存会として改編し、「伝統」ある祭りを現状に対応しながら後世に引き継ごうと動きがあちこちに見られる。

鵜捕部が気多大社まで鵜を参籠し、神事でも重要な役割を果たすことは前述した。近世以来鵜浦に在住し鵜祭にかかわってきた家を中心に、明治になって二戸から成る鵜捕部として再編され、その後戸数が減少して現在に至る。鵜祭へ参加する鵜捕部は決められた順番にしたがって、三戸から一人ずつ毎年出すことになっている。二〇二二年の鵜捕部をつとめたのは岩崎巖さん(八八歳)、小森一平さん(四一歳)、湯口一義さん(六四歳)の三名、いずれも鵜捕部の家の出身である。岩崎さんの最初のおつとめは昭和二〇年代、以来何度かつとめたが、今回で最後という思いで鵜捕部の役を担った。米寿のお歳とは思えない壮健な歩きで気多大社までの三日間、鵜様を参籠し大役を果たした。小森さんの家はこの年の当番ではなかったが当番の家の代役として任にあたった。湯口さんは二男で鵜浦の外に居住しているが今年には本家の代役としてつとめを果たした。鵜捕部の任にあたるのは各家の長男という慣習であったが、諸事情から特例として参加することになった。今後後継者不足となることも予想され、活動を継続するために「鵜捕部保存会」という組織となった。

鵜捕部が鵜浦を出発するのは毎年一月二日、そこから道のりにして四〇km以上、鵜様を入れた籠を担いだ鵜捕部が「うつとりべー」と連呼しながら気多大社へ参向する。この道中を鵜様道中と呼ぶ。鵜様道中では由縁あって立ち寄る場所や一日目・二日目の泊まる宿も決まっている。二日目の鵜様の宿が中能登町良川の鵜家家である。なぜ鵜家家が二日目の宿となったかはっきりわからないが、伝承では日も暮れて暗くなって鵜捕部が迷いそうになっていたところ、鵜家家の明かりが見えたのでそれを目印にたどり着き、宿としたことがはじまりという。以来、代々鵜家家の当主が一月二三日、鵜様をお迎えし歓待してきた。現在は鵜家家出身の道端弘子さん(七四歳)が鵜様と鵜捕部のおもてなしをしてい

鶉はどこへ飛んで行く（市田）

る。道端さんは父親から「どんなことがあっても鶉様の宿は続けるように」と言われたことを守り、自身は富山市在住であるが、鶉宿を引きつぐために時折戻ってきている。しかし一人では限界があるため、鶉家家の親戚を中心として「鶉様道中の宿保存会」を二〇一四年に組織した。自らは事務局長として、鶉宿のみならず鶉祭について広く知ってもらおうと、さまざまな活動をしている。活動の一端を紹介すると、鶉家家の家屋をミュージアムとして開放し、鶉祭や鶉にかかわるものを展示している。子どもたちに向けては、鶉様を参籠するための鶉籠を葦で作ったり背負う体験会や、鶉祭の由来のアニメを制作し上映している。この年は鶉様が来られる一月一日にわざわざ鶉家家の庭園に鶉祭の故事を再現した青いイルミネーションで飾りたて、鶉宿におとずれた多くの人を楽しませた。私も、その日鶉宿ミュージアムで開催された同保存会の講演会で話をする機会をいただいたため、鶉様を迎える冬の光景を見ることができた。かつて鶉様のおもてなしは鶉家家の行事として行われていた。鶉様を拝みに訪れる人も限られていたが、こうした保存会の活動もあり、今では中能登町内外からの多くの訪問者でにぎわい、鶉様に手をあわせていた。

鶉様を一ノ宮の海岸に放った後、社務所では鶉様の神前での動きを神意として読み取り、翌年の年占として公表する。鶉様のご神託はメディアによって新聞やテレビで公表される。今回の鶉様のご神託は、二年間鶉が捕獲できなかったこともふまえて、「慎重に進むべきである。そうすれば光が見えてくる。」と発表された。三年ぶりに「あがられた」鶉様の動きに、能登の人びとは明るい光を見たのであろうか、関係者の安堵の声をあちこちで聞いた。

パンデミックな感染症はこの国の「伝統」的な文化にも大きな影響を与えた。密を生じさせる祭りの中止が相次ぎ、維持・継続が危ぶまれている祭りには痛手となった。カメラに囲まれ、メディアで発信された鶺鴒祭を見れば、維持・継続にはなんの問題もないと思えるかもしれない。しかし現場ではさまざまな問題が生じている。鶺鴒祭に直接携わっている人たちは、伝統も守りながらも現状にあわせてフレキシブルに対応をして維持・継続のために奔走しているのである。

「伝統」という名に固執するのではなく、ゆるやかにかたちを変えて後世に伝えていこうという姿勢。民俗文化とは古くからの慣習の名残でも、かたちを変えずに伝えられてきたものではない。今に生きる人たちが、自分たちの文化を大切にし、維持・継続していこうというさまざまな諸相のなかに浮き上がってくるものではないだろうか。鶺鴒は自分を取りまく状況の変化に戸惑っているかもしれない。「こんなにたくさんの子どもたちに迎えられたっけ？」と。でも鶺鴒はきつとわかっていらっしやる。鶺鴒のご神託が必要とされていること、そのためにがんばって支えてくれている人たちがいるということを。

(本学文学部特任准教授)